

イエスが十字架にかけられた時、その両脇で二人の犯罪者も十字架にかけられた(ルカ 23:33)。

刑の執行はローマ帝国が行なうのだが、総督ピラトはイエスが無罪だと思っていた(23:14)。だが民の要求を呑まなければ暴動になりかねず(23:23)、厳粛な帝国法の「義」を曲げて責任を放棄した(23:25)。イエスを二人の犯罪者と並べたのは犯罪者扱いするためで、エリート役人の言い訳のように思える。

十字架にかけられた一人は、権力者や兵士の侮辱(23:35~37)に呼応してイエスを罵った(23:39)。そしてもう一人はそれをたしなめ(23:40)、「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください(23:42)」と懇願した。

手足に釘を打たれた十字架上のこと、息絶え絶えのやりとりだろうが、イエスは「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる(23:43)」と答えた。

「今日」とは、徴税人ザアカイに語ったごとく(19:9)、神の永遠の時を表しているのだろう。

イエスの弟子となって地上の歩みができなくても、この人のように最後の最後、「イエス(神の救いの謂)よ~わたしを思い出して下さい」と言えたなら、何と良いだろう。この率直な願いだけで、神の永遠の御国に、キリストと共に迎え入れられるのだから。

疑問に思うのは、苦しみと無念さのあまり、傍らのイエスを呪ってしまった者はどうなるのか。

十字架は見せしめ刑であり、両脇の犯罪者は反体制の運動家なのかもしれない。同じ志に燃え、同じ社会を夢見ていた者が、イエスに対する態度が違っただけで、救いと滅びに分けられるのだろうか。そんな図式的な区分けでは、あまりに陳腐すぎる。

権力者はもとより民衆も興奮してイエスの処刑を要求した(23:21,23)。そんな人間の罪と愚かさに対してイエスは祈る。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです(23:34)」。

民の声に呼応してイエスを侮蔑する隣りの犯罪者(23:39)。彼のこともイエスは、「父よ、お赦しください」と祈っているはずだ。そして何より、イエス御自身が、彼の傍らにおられるではないか。そう考えると、十字架にかけられた三人の姿、凄まじい光景だが、何という救いの現実であろうか。

「彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられた(イザヤ 53:12b)」。

この預言はあの丘に、三つ建てられた十字架の光景そのものではないか。キリストの十字架とは、何のためのものだったか。

「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった(53:12c)」。

何ということか。私を含めた「多く(すべて)の人の過ち」のために、私やあなたのように「背いた者」のために、執り成しをしてくださっている。

そのために「自らをなげうち、罪人のひとりに数えられた」。

預言者の言葉からも分かるように、イエスを呪うもう一人の犯罪者も、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる(ルカ 23:43)」。そればかりか、扇動されやすい愚かな民衆もまた憎悪ゆえに、イエスに祈られ(23:34)、キリストと共に御国に在る。

「背いた者のために執り成しをしたのは(イザヤ 53:12c)」は、まさしくこの方、キリスト・イエスであった。

さて私たちは、この場面の誰であろうか。人生の時々違おうだろう。背き、呪ってもいいから、ここを離れないでほしい。救いと、自分自身を得るために。



#### 《おまけのひとこと》

キリストへの言い間違いは少なくない 苦しみのあまり 呪いの言葉を吐いてしまうことさえある 信仰のいかんは問われないのか 御前では 神を呪っても率直な私で立つこと それこそが信仰